



# ほりかね道

狭山市立堀兼中学校便り  
令和6年度6月号  
発行者 和田雅士

## 6月の堀中生の人間性を磨く行動目標

「急いでいても 廊下を走らないで移動できる」(落ち着いた行動)→心のゆとり

# 「江戸しぐさ」が教えてくれること

以前勤めていた学校での出来事です。学校ファームでたまたま私が一人で準備作業をしているところでした。耕運機で土を耕し終え、それをリヤカーに積もうとしていました。結構重いもので、一人でリヤカーに載せるのは難しいのですが、案の定、載せるのに手こずっていました。そこへ、たまたま犬を連れだした60～70代の男性が通りかかり、こちらが頼んだわけでもないのに黙って、助けてくれたのです。「ありがとうございます。」とお礼を言うと、その方は、軽く会釈しその場を立ち去って行きました。私は、心が温かくなるとともに、何も語らず、さりげなく人助けをするその姿に人としての「かっこよさ」を覚え、爽快感すら感じました。「困っている人を見たら助ける」「お年寄りには席を譲る」など、一昔前は、日本人には当たり前の光景だったように思いますが、気のせいかな、近年はあまりそのような光景を見る機会が以前ほどないように思われます。自分の事で精一杯で心にゆとりのない人が増えてきたのでしょうか。少しさみしいですね。それだけにこの件は、当時の私には新鮮だったのかも知れません。

さて、「江戸しぐさ」が見直され、脚光を浴びたのは平成の中頃、公共広告機構(現ACジャパン)のCMでとりあげられた頃でしょうか。起源は明らかではないのですが、江戸時代の町人たちの行動哲学と言われています。「肩ひき」「傘かしげ」「七三歩き」「こぶしうかし」「うかつあやまり」などがあります。いくつか紹介します。

「七三歩き(道)」とは自分が歩くのは道の左側の三割。道の真ん中は、火事を消す人、大八車(だいはちぐるま)に荷物をのせて運ぶ人、手紙を届ける人など、急いでいる人のためにあけておいたのです。「こぶしうかし」とは電車などで人が乗ってきたとき「さあ、ここにおかけなさい」と言わんばかりに、こぶし一つ分、ちょっと腰をうかしてずれていくしぐさのこと。江戸時代、舟が出るのを待つ間、人があとから乗ってくるたびに、こぶしをついて腰をうかせ、席を少しずつ、つめていたことからこう呼びます。「つめていただけませんか？」と言われる前にするのが江戸しぐさ。催促されてから行動するのは恥とされていたのです。三つめに「うかつあやまり」ですが、「うかつあやまり」は、「こちらこそ、うっかりいたしました」というお詫びのしぐさです。他人の足を踏んでしまったら、謝るのは当然ですね。江戸しぐさでは、踏んだ人はもちろん、踏まれた方も謝ります。人が通る場所、立ちそうなところに足を出している方がうかつだったという気持ちをこめてあやまるのです。相手へのその場の雰囲気をよく保つことにもなり、相手への気遣いにあふれたしぐさです。

江戸しぐさとは、これをこうすればよいとか、ここをこう直せばよいとかいうものではなく、社会の中で、お互いに気持ち良く暮らすための人間として人に対する心遣い、自然や生き物に対する気遣いが形となって現れたものです。よく駅の改札で、通路の前で立ち止まって定期や切符を探している人がいます。通路から1歩横によれば次の人がスムーズに改札を抜けることができるのになあと、思うのですが、自分が通るまで通せんぼのような形になっていることに気付かないのでしょうか？ それともわざと通せんぼをしているのでしょうか？ いずれにせよ、後から通る人の迷惑になることは間違いなく、1歩横によけるというちょっとした気遣い・心遣いで、物事が円滑に進み、その場が和むということも少なくありません。

私は「江戸しぐさ」に人間の品性を感じます。「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」という言葉がありますが、外見から感じる凛々しさは内面から湧き上がるものだと思います。私などはまだまだ未熟者で凛々しさが湧き上がるまでには決して至りませんが、子どもも成人も品性の高い内面を有する大人に魅力を感じると思います。

学校、保護者、地域の大人が「江戸しぐさ」のような心遣いと、品のある立ち居振る舞いを自然に子どもに見せられる地域コミュニティは、子どもが健全に育つのに最良の環境だと信じています。

